

7 東国東地域デザイン会議

(1) 沿革

「東国東地域デザイン会議」（以下、地域デザイン会議）は、昭和 58 年に当時の大分県知事であった平松守彦知事を中心に進められた「豊の国づくり塾」の卒業生を主要な構成メンバーとしている。当時「豊の国づくり塾」は、「自立自助により視野を広げ、自らの向上と地域繁栄の道を究め、それぞれの成果を実践に移し、地域に貢献する」人材の育成を目指して、県内の 12 地区に振興局を中心に結成された。当時、県下 58 各市町村から地域の「豊の国づくり塾」に I 期 3 年の期間で 5 名ずつ程度が参加した。その後、東国東地域で活動する「豊の国づくり国東塾」で学んだ卒業生が、発展的解消として地域づくりの手法を東国東地域で実践するかたちで「デザイン会議」を発足させ、平成元年には東国東地方振興局（平成 18 年 4 月の再編により東部振興局）を中心に「東国東デザイン会議」を発足させた。当時の会議は、東国東郡内の有志を中心に 30 代から 50 代の各職種の人々で構成されていた。

こうした変遷を経て、平成 2 年に「東国東地域を中心に、豊かで、心ふれあう、健やかな 21 世紀の新しい地域像を創造し、活力ある地域作りを推進すること」を目的として地域デザイン会議が設立された。先に示したように、地域デザイン会議には「豊の国づくり塾」の卒業生が多いため、多才な人から成り立っている。例えば、役場や商業、農業等、それぞれの地域で活躍してきた人がメンバーになっている。行政との関わりとしては、東部振興局との関わりが大きかったが、補助金はほとんどなく、自分たちで資金を出し合う中で活動を展開した。東国東以外の地域でも、例えば臼杵地域デザイン会議といったように、「豊の国づくり臼杵塾」の延長としてそれぞれの「デザイン会議」が設置されていた。ほかの会議はそれぞれの理由で解散したり、形を変えたりする中で東国東の会議は残ったという状態にある。ただし、ほかの「デザイン会議」の解散は、消極的な解散というよりも、団体が育ったことによる積極的な解散だといえる。地域デザイン会議が設立された当初は、社会教育課は社会教育団体や青年団の支援、市長部局は地域振興を担っていた。地域デザイン会議は、どちらかと言うと後者に属するといえるが、その中で活躍する人が社会教育行政担当者やその OB であったり、かつての青年団員も多かったりと、社会教育との親和性が高い。

(2) 運営の実際

① 会員・会則・会費

会員…29 名（平成 23 年度）

構成メンバーとしては、自営業者、議員、農家、行政職員、社会教育団体関係者等が挙げられる。地域デザイン会議は、その構成メンバーがそれぞれの地域の団体で中心的な役割を果たしており、メンバーがそれぞれの地域でそれぞれの団体での顔をもつという性格の団体である。例えば、地域デザイン会議のメンバーの一人は「明日を見つめる'あき 21」という団体で活躍している。地域デザイン会議は、そうした各地域の団体の連絡組織になっている。その大きな目的は地域の振興だといえるが、団体の役割はそれぞれの地域で活動する団体の連絡調整になる。例えば、地域

デザイン会議が「いかだレース」や「菜の花マラソン」といった事業を行おうとする場合、地域デザイン会議のメンバーが所属するそれぞれの団体が協力体制を作り、ある事業は「明日を見つめる’あき 21」が主体となり、ほかの事業は「菜の花会」が主体となるなどの体制で進められる。こうした活動が長く続く理由としては、メンバー同士の関わりが緩やかだからである。いずれの集まりも強制的ではないので全員そろうこともないが、お互い昔からのつながりを持っているために、緩やかで良い関係が続いている。

会則…東国東地域デザイン会議会則

会費…年 2,000 円主な組織構成

ア 総会 年 1 回開催（会長による招集。臨時総会も開催可。）

イ 事務局 大分県東部振興局内

（3）活動の実際

地域デザイン会議の活動として、総会、研修会、「地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」（以下、実践交流会）がある。総会に併せて実施される研修では年間の活動テーマが決定されることとなる。その際、大分県東部振興局長や国東市長及び行政の職員にも参加をしてもらい、会員と行政とのつながりを持てるようにしている。総会時の研修以外にデザイン会議が主催する研修は、減少傾向にある。

実践交流会は、地域デザイン会議が主催して実施する事業であり、各地域の実践を発表し合うことにより他団体と交流する機会となっている。実際に現場で活動をしている人との具体的な情報交換は重要であり、こうした場が設けられることは大切である。実践交流会は、大分大学高等教育開発センターとの協働により運営し、地元の新聞や NPO 法人大分県「協育」アドバイザーネット等を活用した情報収集や社会教育関係者同士の連絡を取り合っている。また、福岡県教育委員会と日本生涯教育学会九州支部の主催で実施される「中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会」の大会の会との関わりも重要で、地域デザイン会議の実践交流会を後押ししてくれており、基調講義を福岡の実践交流会実行委員会のメンバーにお願いすることもある。デザイン会議は東国東地域を対象としていたが、平成 19 年にこの実践交流会が開始されたことで、地域を越えて県下に広がった。実行委員は県下に置かれ、実行委員のメンバーは東国東地域に限らない。このように、実践交流会の実施には地域デザイン会議だけでなく県の社会教育主事の協力も必要であった。こうして、県や大学の協力といった条件がそろったことで、初めて実践交流会を実施することができた。会場の梅園の里は、平成 10 年にオープンした宿泊研修施設で、今は指定管理で運営している。天文台や大浴場なども整備されている施設で、宿泊者 40～50 名泊まることができる。国東市内の人は通ってくるが、参加者の内 30 名程度は宿泊する。近年は国東高校や大分大学の学生も参加してくるようになった。



<写真1>全体会場での高校生の様子
ングの様子



<写真2>三浦梅園学びの道ウォーキングの様子

(4) 課題と展望

先に示したとおり地域デザイン会議は連絡組織という性格が強いため、団体組織としての課題ではないが、地域デザイン会議が関わる事業が地域経済に結び付くようになると良いと考えている。例えば、衰退の一途（いっと）をたどる農業の振興に何か寄与できないかと思う。以前は、農業振興のために農協や行政の担当課が地域の農業者と緊密な関係をもっていたし、地方の主要産業は農業であることが前面に出されていた。しかし、今はそうした体制も弱くなっているとともに、専門性を持つ職員の配置がされなくなってきて、地域の経済を支える農業と言えなくなってきている。地域の特色を生かした農業の方策を提案したい。また、地域で活動する人が高齢化しているということが懸念される。若い人の加入は、地域の活性化にもつながるし、様々な人との意見交換によって、地域だけでなく、広域的な活動が可能になるのだが実態はうまくいかない。しかし、地域内のグループの中で、少しずつではあるが若い人自身も活動の必要性を感じ始めている様子が見られる。

地域デザイン会議の今後の活動として、特に、子供が様々な体験をする場面を増やしていきたいと考えている。そのために、いろいろな団体との連携がますます必要になってきている。例えば国見町の子供を対象にした「地域の文化財探訪」や、「ミニ・トレッキング」、安岐町の「三浦梅園学びの道ウォーキング」という事業についても、地域内の実績のある団体メンバーに協力を求めて、地元の学校や公民館との連携を図りながら実施している。また、中学校の1年生を対象とした山登りも、学校が行事として取り組んでくれている。小学校では、神楽などの伝統芸能に取組、地元のお宮で演じることもある。そうしたときには、地域担当の先生が手伝いに来てくれる。また、学校支援地域本部ではないが、国東市内旧町ごとの中央公民館に非常勤の「協育ネットワークアドバイザー」を配置し、最近では、国東市の各地区公民館全18館に非常勤の館長と主事を配置している。やはり地域づくりには公民館活動が大切だという考えが背景にあると考えられる。

地域デザイン会議の今後の活動の展開には、こうした機関や団体とのネットワークの構築が重要な位置を占めることになることは確かである。いずれにしても団体メンバーの高齢化が進んでおり、10年後にデザイン会議がどうなっているか分からない状態にある。タ

ーニングポイントが必要になる時期だといえる。若い人に集まってもらい、関心を持ってもらいたいと考えており、各地域で30・40代の若手を掘り出している。

訪 問 日	平成 24 年 11 月 29 日	
対 応 者	東国東地域デザイン会議事務局員	富永 六男
訪 問 者	社会教育実践研究センター社会教育調査官	濱中 昌志
	社会教育実践研究センター専門調査員	加藤 由以